
シネンシス

遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シネンシス

【Nコード】

N7122B

【作者名】

遼

【あらすじ】

早咲きの桜の下で出会った女の子。屈託のない笑顔の似合う、可憐な女の子だった。彼女との出会いは、捻くれた僕を更に捻りあげてしまった。

ぱっ。

桜は散るから美しいんだそうだ。

桜の下にはヒトの死体が埋まってるから、その養分で美しくなる
とも聞いたことがある。

桜に纏わる噂は色々あるけれど、僕にはどれも信じられなかった。
もちろん「桜はいつも美しい」なんて綺麗事を言うつもりじゃなく、
諸説全てが都市伝説の類としか思えなかっただけの話だ。人の感情
も同様に、散るから美しいのだったら、永遠など欲しがるものか。

桜はそれでも綺麗だ。特に咲いた後に風で舞うと、まるで雪のよ
うに町を彩ってくれる。

桜のような雪だったか雪のような桜だったかは定かじゃないけれ
ど、僕がその木に目を向ける頃には、いつも雪が降っていた。

雪が解けた後、その地面の下には何が残っているのだろう。

ぱっ。

僕が彼女に出会ったのは、確か冬と春が出会う頃だったと思う。春が恋の季節だって、思わず信じたくなるような出会いだった。

「こんにちは、お元気ですか？」

木を見上げる僕に、彼女はそう声をかけてきた。それがどんな木だったか、今ではもう霞がかかって思い出せない。ただ確かだったのは、僕らの息は少しだけ色づいていた、ってことくらいだ。

「この木、好きですか？」

屈託のない笑みから覗く白は小さく輝いていて、健康的な美しさを感じたものだ。人懐っこい彼女の笑顔に対して、それなのに捻くれた僕が抱いた感想は、「すぐ騙されそう」だった。可愛げのない視線を受けて、彼女は何を想っていたのだろう。

事実、彼女はすぐに騙されてしまった。

ああ、世界はなんて醜いのだろう。彼女との出会いは、僕をますます捻り上げてしまったのだった。

あと一ヶ月と少しで、僕は高校生になる。緊張と不安、それから微かな期待が胸を占めて、この頃から寝つきが悪くなっていた。もちろん寝不足になるほどじゃないし、体調が悪くなることもなかった。

ただ、目だけが日に日に冴えていく。見えないものまで見えてきそうなほど、僕は昂ぶっていた。

父さんと母さん、それから隣に住んでる幼馴染。皆でお祝いのパーティーをしたのはつい最近のことだ。浮かれた僕と幼馴染は、普段ならできないこと——例えばハグとかキスとかを、酔った勢いで何でもした。翌日には、首をつりたくなるほど後悔したけど。幼馴染とは、それ以来会っていない。彼女はきつと、怒ってるだろう。

窓を開くと、突き刺すような風が回りながら部屋に入ってきた。冷たいという感覚が、温かい身体から無理矢理引き起こされて、思わず身震いした。部屋中を跳ね回る光の粒や波が、僕の目を楽しげに挟む。

「寒いけど、いい天気」

小さな音は、たくさんの光と共に窓の外へ消えていった。

パジャマから私服に着替えたら、腕時計をはめてドアを開いた。空色のフードパーカーが、少しだけの残滓を部屋に落とすと、僕はメガネをかけて小さく微笑む。

「何日ぶりかな、こんなに寒い。何か楽しいこと、ありそうだな」
春近し。風の通らないリビングは、麗かな陽射しに包まれていた。

幼馴染の家の前を通り、僕は財布と携帯だけを持って意気揚々と歩いていた。寒いから人通りは少ないけど、だからこそ外に出たくなる。この景色、この町は僕だけのものだ、なんて一人で笑うと、大層気分がよくなった。

雪色の空気。微かに白んだ町はそれなのに澄んでいて、遙か遠くが容易に見渡せた。

どこへ行こう。選択肢は無限大だ。

「冷たい空気って、不思議と綺麗に思えるよね」

肺を満たす清浄な空気。本当はきつと排気ガスに塗れているんだろうけど、今の僕には猪苗代湖の水とだって比べられる。主観が全てを変えてくれるなら、この世界はきつと綺麗だ。

僕の歩調は自然と軽くなる。歳とともに育っていったモラルが邪魔してスキップなんかができないのも、今日は不思議と残念だった。靡いた髪に引っ張られて、僕は首を傾げた。思わず横に向けた視線が捉えたのは、遠くに見える小さな丘。雑木林に包まれたそのの頂上には、確か――

決めてからは早かった。コンビニで温かいお茶と肉まんを二つ買って、すぐに向かったのだ。

「……随分、早咲きなんだな」

案の定それはそこにあっただけ、その姿は予想と少し違った。蕾が点々とついてる程度だと思ってたんだけど……なかなかどうして。白い花が、少しずつ開き始めていた。淡く桃色に染まったそれは、きつと見られてることに照れてるんだろ。可愛い花、なんて。

肉まんはすっかり冷めてしまったけど、僕はその木から五メートル手前に座ってそれらを傍らに置いた。名も知らぬ草が、冷たい空気にかざりと音を立てる。

「美春も連れてきたら、機嫌直してくれたかな」

幼馴染の名前を呟いて、思わずすぐに否定してしまった。酔った勢いとはいえ、ああまでするつもりはなかったんだ。僕の頬を熱くしたのは、きつと羞恥だろう。

お茶を啜ると、少しだけ喉が温くなった。それは思わず吐き出しなくなるほど不味いものだったけど、情緒を醸すには十分なアイテムだった。渋い緑茶を楽しめるほど成熟した舌を持つてゐるわけじゃないけど、僕は少しだけ大人になった気がしていたんだ。

捻くれてるんだろ。大人になる前の子供って、そういうものだ。少しだけ笑った僕の肩に、影が差した。

美しい人だ。

黒い髪。桜色のダッフルコートと、ダークブラウンのキュロットスカート。同じ色のブーツは膝まで伸びて、少しだけ覗いた脚が締まって見えた。コートより艶やかな口元と、キュロットより輝いた瞳で笑んだ彼女の顔は、今まで僕が見た人の誰よりも優しかった。そして純粹で曲がったことの一つも許さぬ、屈託のない笑顔だ。

「こんにちは、お元気ですか？」

雪より小さく、目の前の木より確かな声。返事も忘れて聞き惚れた。

「こんにちは！」

「あ……どうも」

なんとか声に出せたのは、それだけ。残りの言葉は喉の中に降り積もって、水で流しても出てきくれそうになかった。

「わたし、春花っていういます」

「はる、か？」

「はるのおはなです。素敵なお名前ですね」

笑うところなのかどうなのか、この時は少し自失していてわからなかった。ただ本当に思ったんだ。

「綺麗な、名前だね」

「はいっ」

何度言葉を重ねても、春花ちゃんは表情を改めようとしなかった。警戒心を抱くどころか、誰にでもついていきそうなほどに人懐っこいところがある。知らない人には、簡単に名前を明かしたらいけない時代だっというのに。

歳相応。といえばそれまでか。見た目は、小学校から中学校へ上がるくらいだろう。

「ここ、よく来るの？」

「はいっ。このお花、大好きですから！」

「……そっか。君の名前と、同じだからね」

「おなじ、ですか？」

頷くと、彼女はようやく笑顔を変えた。今度は僕を覗き込むような、興味を全面に押し出した顔をしている。くりくりとした茶色の瞳が、僕の目を捉えていた。

「桜は、春の花だからね」

「はえー……」自分の身長の五倍近くありそうな木を見上げ、息を漏らした。「すごいです」

「春花ちゃん、肉まん食べる？ もう冷めちゃったけど」

興味という名前の表情は、僕にとって新鮮だった。僕の周りは、知ってることばかりだった。

春花ちゃんは呆然と木を見上げたまま、返事をしようとしなない。

もう一度呼びかけてようやく僕に気付き、「いただきますっ」と元気に微笑んだのだった。

「……美味しい？」

無我夢中。春花ちゃんはまるで肉まんを知らないかのように目を輝かせてかぶりつき、そして感動した後に桜への興味を薄めた。

ため息一つ、再び桜の木を見上げた。少し早い、そして誰よりも早い花見。

ほら、いいことあった。

ほら、この景色は、この町は、この世界は、僕だけのものだ。それとも春花ちゃんと、二人だけのもの、かな？

「ぷはっ！ はー！ 美味しかったですー！」

「ははは、そりゃよかった。僕の百円玉も浮かばれるよ」

豪快なため息は、僕のため息なんて意にも介さなかった。色は白、すぐに消えた。

「お礼、しましょう！」

「いいよ、別に」

「いやっ。受けた恩は返さないっ」

無駄に拳を握り締めて力説する春花ちゃんを、僕は止める手立てをもたなかった。

「じゃあ、一緒に花見しよう」

「……それだけですか？」

「騙されたと思ってさ。一人で見るより、春花ちゃんと見た方が楽しそうだ」

「じゃあ、はい！ お隣、失礼しますね」

僕から五センチ。春花ちゃんは勢いよく腰を下ろした。

少し痛がつたけど、平気だよと笑う春花ちゃんの頬が、桜色に染まっている。触れなくなる衝動をどうにかして堪えることができて、僕は少しだけの安堵を吐いた。

桜を見上げる春花ちゃんは、出会ったあの瞬間と同じ笑顔だった。純粹で、屈託なく、そしてどこまでも——他に言葉は見つからない

けど、プリミティブな。春は恋の季節、なんて言葉が脳裏に浮かんだ。それが恋心かどうかはわからないけど、僕は確かに彼女の笑顔に見惚れていたんだ。

「綺麗ですねー」

「そうだね」

桜なんて、見ちゃいけないけど。

「お名前、訊いていいですか？」

「僕は――」

春花ちゃんは、笑った。

「この木、好きですか？」

続く

さあつ。

季節の重なる時間は、とても温かい。

季節が移り変わっていくと、その温もりに堕ちていきそうになる。咲き誇る時間は、もう間もなくだった。

さあつ。

僕と春花ちゃんは、毎日のようにあの桜の木の下で会うようになった。ほんの数時間の逢瀬は、僕らに笑顔を与えてくれた。春花ちゃんはきつと、まだ悲しみを知らないんだろうと思う。だから、本当は笑顔と好奇の表情しか、僕は知らない。

残念だけど、それはそれでいいのだと思う。悲しみを知らないことが善いことだとは言わないけど、あの笑顔は見ていて落ち着くん

だ。少しだけ「アホっぽい」けれど、妹のようで、恋人のようで、彼女が笑顔を咲かせるたびに誇らしい気分になる。僕がこの笑顔を作ってるのかな、なんて自惚れることもあった。

もうすぐ春が来る。この木の仲間が、町のいたるところで見られるようになるだろう。

その日を、僕は春花ちゃんと一緒に迎えたいと思っていた。その時僕らは恋人で、二人きりになって見上げているかも知れない。春は恋の季節なんて言うけれど、もしかしたら僕が恋をしたのは春花ちゃんじゃなくて、春という季節なのだろうか。

今日は寒かった。一過性の暖冬が過ぎて、この町はたくさんの寒気に包まれている。

僕は、目が覚めると必ず窓を開ける。それは小さな窓だけど、しかし冷風と共に入ってくる春の気配は、日に日に大きくなってきていた。

中学校は、まだ終わらない。毎日の学校は、それは苦痛なものだった。期待を含ませるものではあったけれど、同時に「今日は会えないんじゃないか」という不安すらも孕んでいたからだ。

黒い学生服は喪服のようで、あまり好きじゃない。首元までががちに固められると、身体と同時に心まで拘束された気分になる。僕は第二ボタンから下だけを留めて、ベルトもいつもより一つ緩めてから部屋を後にした。

朝食の席に美春がいた。彼女と会うのはどれだけぶりだろう、ここ最近は桜の記憶しか残っていない。

「おはよう、美春」

返事はなかった。

まだ怒ってるんだろうか。難しい年頃を、可愛らしく思うと同時に多少鬱陶しくも感じ、僕は彼女の目の前の席に陣取った。トーストを啜え、それに視線を落とした美春は、まるで僕に気付いていないみたいだ。

謝る気はない。悪いのが僕だとしたらそうするのが筋なんだろうけど、あれは共犯のようなものだったはずだ。「女の子だから」なんて言い訳が通用するほど、僕の性別観は偏っちゃいない。ファーストキスが大事なのは、男も女も同じなんだ。

かといって僕が不機嫌かというと、別にそうでもない。大事だけど、美春が相手ならどうでもよかった。あまりに気安い仲だから、ノーカウント同然だ。

彼女にとって、それはそうでなかっただけのことなんだろう。

ため息一つ、僕の為に母さんが用意してくれたコーヒーを啜った。最近朝食は摂らず、代わりにこの琥珀色の甘いコーヒーを飲むことにしている。

「朝ご飯、食べないの？」

「食べないよ」

ようやく口を開いたと思えば、お説教だろうか。勘弁して欲しい、美春は僕の親じゃないのに。

「身体に悪いよ」

「大丈夫」

セーラー服のリボンを弄りながら、美春は上目遣いに言い募る。怒ってる、とは少し違うみたいだ。だからといって、僕は美春の機嫌を窺ったり取ったりする気は起こらなかった。ただ精一杯だったんだと思う。

美春は、生まれた病院から何まで、いつも僕と一緒にいた。異性の幼馴染が成功しないのは、付き合いが短いから。あまりに一緒にいるのが当たり前すぎた彼女は、ある意味ではきょうだいだった。彼女が僕を心配するのもそれを僕が受け流すのも、日常にある「当たり前」だ。僕は中学に上がって少しだけ照れ臭くなり、しかし彼女はそういう機微をあまり意識してないみたいだった。

「おにぎり、作るよ」

「別にいい」

「食べて」

「いらないよ」

女の子、特に美春という子は、気に入らないことがあるとすぐに瞳に涙を浮かべる。それが嘘でないことは僕が一番よく知っているし、放っておけば本格的になることも知ってる。だけど、従ったところでもろくなことはないってことも、僕は知ってるんだ。

美春は、可愛いんだ。性を意識し始める頃から、美春は何度も告白を受け、そしてその全てを断ってきた。そんな子から手作りのお弁当を受け取ればどうなるかくらい、僕にだって想像はできる。

しかし弟——或いは兄である僕のことを、美春は放っておけないんだろう。

「怒ってるの？」

「何を？」

「その、パーティーのこと」

「美春は？」

「わ、私は別にいいもん。気にして、ない」

「じゃあ、僕も気にしてないよ」

ああ、今日もだ。美春は俯いたまま、嗚咽し始めてしまった。こうなると王道パターン、母さんが跳ぶようにキッチンから顔を出して——「美春ちゃんに謝りなさい」

冗談じゃない。

気にしてないなら、謝る必要ないじゃないか。

通学路を吹き抜ける風は、容易に学生服を貫いた。身体を通っていった風はそのまま町の隅に消え、その代わりに僕らの身体に冷気だけを残していく。

「寒いね」と呟いた美春の目に、涙の影はない。彼女の体質なのだろう、目が赤くなることもなければ、目の下を腫らすようなこともなかった。そっけない僕は、彼女をいつも傷つけてばかりいるのに、彼女は僕に傷を見せようとしない。

不公平じゃないか。美春は、一方的なんだ。

「ねえ」

「どうしたの？」

「怒ってるんでしょ」

「怒ってないよ。悪いのはお酒で、美春は何もしてないじゃんか」

「……そう、なの？」

「そうなの。頷くと、美春はまたリボンを弄くりだした。セーラー服になってから、彼女はことあるごとにこうするようになった。」

「私も、怒ってないよ」

「知ってるよ」

いつまで経っても、美春は本意を見せようとしなかった。

そしていつまで経っても、僕の下を離れようとしなかった。

桜の木の下には、既に春花ちゃんが来ていた。学校がある僕よりずっと早く来ているのだろう、彼女の身体はいつも冷え切っている。走ってきた僕の身体は程よく温まっていて、代わりに冷めないように抱いてきたお茶を彼女の頬に当ててあげるのだ。

「こんにちは！」

「はい、こんにちは」

「今日も桜さんは綺麗です」

「そうだね、綺麗だ」

キャップを開けてあげてから渡すと、春花ちゃんは嬉しそうに三口だけ飲む。その後に豪快なため息をついて、僕の学生服の裾を引っ張るのだ。

「隣、失礼します」

「どうぞ。冷たくてごめんなさい」

「いいよ。僕が温かいから、ちょうどいい」

僕らの距離は、いつも五センチ。この距離が近いのか遠いのか僕にはわからないけど、きつと春花ちゃんにとって一番近い距離がそれなんだろう。出会った日から、ずっと変わってない。

肉まんの包みをあけて、二つを春花ちゃんに渡した。

「ありがとうございます！」

「どうしたしまして。冷めないうちに食べてね」

「はいっ」

この時の笑顔が、僕の二番目。一番はもちろん、桜を見上げるあの笑顔だ。

「美味しいですね。肉まんは、好きです」

「知ってるよ。今度、他のも買ってこようか？ あんまんとか、カレーまんとか」

「お肉がいいです」

「あはは、知ってる」

意地悪です、なんて頬を膨らませる春花ちゃんを笑って、僕はお茶を一口だけ飲んだ。僕の肉まんは一つ。

安物だ。コンビニに売ってる大量生産品なんて、そう大して美味しいはずもない。今更何の感慨もありやしないけど、春花ちゃんが美味しいというだけで、まるで別物のように感じられて、それがとても不思議だった。

春花ちゃんは僕の興味を満たす存在でなく、僕の興味を作る女の子だった。

「美味しかったです」

「早いね、食べるの」

「はいっ」

二人で笑い合った。細めた目に映る、春花ちゃんの茶色い瞳。今朝飲んだコーヒーは、どうしてあんなにもくすんでいるのだろう。

「かす、付いてるよ」

頬を擦ってあげると、春花ちゃんは目を閉じて小さく呻いた。

柔らかな頬。産毛がふわふわしてて、ぼてつとした流線型の、弾力のある可愛いお肉だ。食べたくなる、っていうのはこういうことをいうんだろうか。

ほんのりと桜色に染まったそれは、少しだけ彼女を温めたようだ。「桜、綺麗ですよ」

僕はようやく食べ物で消化して、桜の木を見上げた。花卉は大きく、色づくものも多い。日に日に成長していくその木は、僕らの関係によく似ていた。

美春のこともたくさん話した。そのたびに春花ちゃんは興味をそのまま表情にして、「わたしとその人、似てますか？」なんてことを僕に尋ねるのだ。

「桜、あと少しで全部開くでしょうか」

「そうだね、一週間もしたら満開になるかも知れない」

「楽しみですな！」

僕は怖いよ。

そうしたら、君と出会う時間がなくなっていく気がしたから。

美春のことを話した。そうしたら春花ちゃんは、怒ったように言ったのだった。

「泣かせたらだめですよ！」

ああ、僕は君を焦がれてるのに。

君はいつも、僕の気持ちなんて知らないみたいに笑うんだ。

それでもその笑顔が眩しくて、僕も笑った。

会えない時間と、会えない時間。重なっていく季節の移り変わりに、僕は翻弄されて堕ちていく。

美春は怒ったように言ったのだった。

「隠してても、私は知ってるもん」

続く

はらり。

散るから美しいというのはともかく、散り際が一番美しいのは認めよう。

あの吹雪は冷たくなく、そして色づき鮮やかで、何よりの笑顔をを見せてくれるんだ。

僕はあの笑顔を忘れない。

でもあの日のことを尋ねられても、ひねた僕は、きっと照れ隠しでこう言ってしまうんだろう。

はらり。

僕は春花ちゃんのことを、何も知らない。

どこに住んでるかも知らないし、何歳なのかも知らないし、どの

学校に通ってるのかどうかすら、僕は知らない。

そして春花ちゃんは、僕のことを何も知らない。

どこに住んでるかも、何歳なのかも、どこの学校に通ってるのかもだ。

それでも話の種が尽きることはほとんどなかったし、例え尽きたとしても僕らの目の前には大きな木があった。退屈なんていう言葉は、僕らの時間の中に存在しなかったと思う。見上げるだけで、笑顔が咲いた。

僕らの距離は未だ五センチ。

或いはそれは、壁のようなものだったのかも知れない。

「おれんじじゅーす、ですね」

「そう、オレンジジュース。たまには子供らしくこういうの飲もうかと思って」

彼女の表情は、やはり好奇や興味。僕が持ってくるもののほとんどが、彼女の初めてだったようだ。肉まんも、ペットボトルのお茶も、そしてオレンジジュースすらも知らないようだった。

それもいいだろう。彼女が喜んでくれるなら、僕だって嬉しいんだから。

キャップを開けて渡してあげると、春花ちゃんは恐る恐る飲み口にその可愛い唇を重ねた。少し撓んだ唇は、歳の割に艶やかで、僕は少しだけ鼓動を速くしてみるのだ。彼女の魅力は、どこまでも深く底なしだった。

息は白くならず、その代わりに僕の顔を襲った。春花ちゃんの吐息は、とてもいい香りだ。

「美味しいですっ」

「そう？ よかった」

「甘くて酸っぱくて、素敵な味ですね」

隣に座る春花ちゃんの瞳は、真っ直ぐに僕の目を捉える。桜よりも僕を選んでくれることに、少しだけの優越感を感じた。

「素敵なもの、たくさん知ってるんですね」

「そうかな。今度町に出て、一緒に買い物でもしようか？」

「……わたしはここがいいです」

「そう……？ 残念だけど、仕方ないね」

「ごめんなさい」

「いいよ。僕も、春花ちゃんにはここが似合ってると思う」

だから、そんなに済まなさそうな顔をしないで。初めて見た戸惑い、或いは悲しみという表情に、僕の心がざわざわと音を立てた。

春花ちゃんには、やっぱりこの場所が——笑顔が良く似合う。

オレンジジュースを一口飲んで、春花ちゃんは落ちてきた花弁を見事にキャッチした。まるでそこに落ちるのがわかってたかのよう

に、すぐにその手に収まった。

「咲く花もあれば、散る花もあるんですね」

「満開になるまでに、何回か入れ替わるんだろうね。大丈夫、まだ増えるよ」

「たくさん開いて綺麗になったら、わたし、恋をするんです」

面白いことを言う。と同時に、僕は軽い嫉妬心を胸に抱いた。春花ちゃんと付き合うことになる男にだろうか、それとも恋そのものにか、或いは桜にかも知れない。いずれにしても、その相手が僕であることを、僕は切に願った。

僕は春花ちゃんに恋をしてるんだろうか。五センチが僕らの距離だから、それ以上縮まることは、これから先もないんだろう。僕の距離であり、また春花ちゃんの距離でもあった。

「相手があなただったら、嬉しいかもですね」

「僕も。君の相手が僕だったら、嬉しいかも知れない」

笑い合って、桜を見上げた。

僕らの目は、いつも桜に向いている。僕が春花ちゃんを見るの

かも、春花ちゃんが僕を見ているのかもわからない。五センチが僕らの距離で、桜は仲人でもあって、同時に壁そのものでもあった。

手に収まった桜の花弁をペットボトルに入れて、春花ちゃんは才

レンジジュースを全て飲み干してしまった。

「これ、大事にしましょう」

「オレンジで濡れちゃってるけど」

「あなたの思い出です」

「まだこれから、たくさん会えるじゃないか」

俯いた春花ちゃんは、笑うだけだった。

言っておくれよ。「また会いましょう」って、君の口から聞いたことがないんだ。この木がある限り僕らの間はずっと五センチ。それ以上離れることなんて、ないんだから。

「知ってますか？」

桜を見上げるあの笑顔で、春花ちゃんは初めて僕を捉えてくれた。桜の花弁は、一つとして同じものがないんですよ」

「またどこか行っちゃうの？」

もう授業なんてなくなり、何をしに行ってるのかもわからない学校からの帰り道。美春は、丘へ向かう僕の横顔にそんな言葉をぶつけた。

「いい場所を見つけたんだ。いつか美春にも教えるよ」

「ついていていい？」

「また今度な」

丘へ向かう道は、あと数分で姿を現す。そこに来ると、美春はいつも泣きそうな顔で「またね」って手を振った。その言葉は僕が何よりも望んでいるというのに、美春のそれでは満たされることがなかった。

僕が欲しいのは、桜のような美しさなのだろう。いずれ終わりのゆくものだから、だからこそ続きが欲しいと願う。

贅沢者。ひねた僕に相応しいあだ名だ。

「いつも楽しそうに帰ってくるよね」

「どうして？」

「窓から、見えるから」

ほら、まただ。リボンを撫でながら、美春は小さく呟く。

「いつも見てるの？」

「あ……うん、いつ帰るのかなって」

ふーん、気のない返事をしてから、僕は鞆を持ち直した。教科書も何も入っていない鞆の中で、筆箱が揺れて音を立てた。美春にもらった小さな筆箱は、もう何年も使っている。

「いつまで、続けるの？」

「春が来るまで」

美春が笑った。春らしい、暖かい笑顔だ。

「じゃあ、もうすぐなんだね」

恋をしたんだ。

僕の声に、美春は泣き崩れてしまった。電話越しのその泣き声は、久しぶりに聞いた本気の声だったと思う。

春花ちゃんに会って、何もかもを忘れてしまう。例えば学校であった嫌なこと。例えば親に説教されたこと。例えば、僕が春花ちゃんに抱いている気持ちのこと。

だから僕がプライベートのことを話す時は、いつも美春が登場することになった。春花ちゃんは嫌な顔一つせず、その代わりに例の好奇心旺盛な茶色を僕に向けて、爛々と輝かせるのだ。

好きなんですか？ そんな言葉が僕を傷つけることもあった。

「美春さんは、可愛いですか？」

「ああ、可愛いと思うよ」

「名前似てて、なんだか他人のようには思えないんですよ」

ああ、美しい春の花。ぴったりじゃないか。

「結婚する？」

「怒りますよ？」

笑って、春花ちゃんは僕の肩を小さな拳でぽかぽかと叩いた。一頻り戯れてから、春花ちゃんはそんな疲れなど見せずに笑う。

そして木を見上げ、いつものように僕から五センチ。

「綺麗ですね」

「満開、だね」

桜の花弁は全て開ききり、見ごろを迎えた。色づいた桃色は圧倒的で、風に靡くたびに少しだけの雪を散らしてくれた。丘の空気に淡く霞んだ桃色の霧は、少しずつ周囲と溶け合っている。美しい、のだろう。

まだ、会えるよね？ 僕らの関係は、これが全てだったんだ。今気付いたんだ、この五センチに、僕らの心なんて入ってなかったこと。

「僕、帰るよ」

「もう、行っちゃうんですか？」

「うん。美春が心配してる」

言い訳がましい言い訳に、僕は自分で辟易した。もっと言葉があったらうに、こんな風に春花ちゃんを傷つけてしまうことに、苛々したんだ。

そうだ、苛々したんだ。君は、君の気持ちを一度も僕に見せてくれたことがない。

「……お元気で」

「春花ちゃん」

俯いた顔を恐る恐る上げ、春花ちゃんは茶色い瞳を潤ませた。

「またね」

「……はい。また」

ありがとう。僕はそれだけ呟いて丘を後にした。

春一番が吹いた。

春が到来して温かくなり、その気配より存在を感じさせる強いものだった。

さあ。一気に吹き抜ける風は、僕の心を一瞬で薙いでしまった。恋心、或いは恋という存在そのものを。

春になったから、美春を誘った。そうなら終わる約束だったし、一度くらいは美春を連れてきたかった。彼女とは、なんでも分かち合ってきた。今更僕が何かを独り占めするなんて、到底できそうになかったんだ。

丘へ続く雑木林の中、雑草を掻き分けて登った。その小さな傾斜にも美春は疲れた様子で、僕はそんな彼女をからかいながら、一応歩きやすいように道作りに励んだ。

太陽の光は少しだけ遮られ、ちょうどカーテンをした僕の部屋のような明度だった。暗くて怖い。美春はすぐに弱音を吐いた。

「まだなのー……？」

「もう少し。ほら、向こうに光が見えるだろ」

顔を上げた美春は、すぐに項垂れる。

「まだ遠いよ」

お茶と肉まんを持って、僕は道を急いだ。美春が十メートル後ろで泣きそうな声を上げたけど、僕にだって余裕はなかった。体力的なものでは、ないけれど。

春が来た。これから温かくなって花が咲き、僕らは一つだけ歳を経る。高校生なんて目新しいものに対する緊張と不安、期待が胸を占めて、その癖この温もりは冬に冷やされた心に平穏をもたらすのだ。

緩やかな並木道。この季節は、それを思わせた。

「着いたよ、美春」

もう十五メートルも離れてしまった美春に、大きく声を張り上げた。

僕の目先に見える、大きな桜の木。けれど――

「……そっか」

――もう、散ってしまった。

不思議と感慨はなかった。その感慨というものを感じるべきところがちょうど空洞になって、僕は何も感じる事ができなかった。

んだ。美春には悪いことしたな、なんて言葉が脳裏に浮かんで消えた。

十メートル、ゆっくりと歩いて根元に寄った。僕のメガネは、茶色しか映していない。

そして気づくんだ。

彼女がいないことに。

喪失感は無かった。その代わりに、僕の心には最初から何もなかったかのような、空虚感だけを感じる。入り込んでくるものが一つしかなくて、僕は幹に触れた。

「またねって、言ったじゃないか」

僕らの距離は、いつも五センチ。初めて触れた彼女の身体は、大きくて温かなものだった。見上げるべきものもなく、空は空虚に晴れ渡り、太陽が寒々しく彼女を照らし出していた。厳しい冬を越えたと思ったのに。

ほら、初めて会った時から思ったんだ。騙されやすそうな顔してるって。案の定君は、少し早くにやってきた、一過性の春に騙されてしまった。おかげで、咲くべき季節を間違えてしまった。

「春花ちゃん……」

僕は、ここに来て初めて、この場所から桜を見上げた。

「笑顔を、もう一度見せておくれよ」

さあっ——

風が吹いて、枝の隅が揺れた。落ちてきたそれは、吹雪というには余りにちつぽけなものだったけれど、確かに笑顔だったんだと思う。

僕らの距離が、ゼロになる。手のひらに君の笑顔。

「もう、散っちゃったんだね」

「ああ、美春。僕は——」

肩の触れる温もりと、手のひらで包んだ温もりが、溶け合って僕を撫でた。

僕はそう。

「——これに恋をしてたんだ」

根元から、埋まったペットボトルのキャップだけが覗いてた。

終わり

はらり。(後書き)

変態ちやうわっ

主張するべきところは間違えずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7122b/>

シネンシス

2010年10月8日15時44分発行